

現代日本の公共図書館における平面構成の特徴と課題 —単館と複合館の比較分析—

星 愛美

日本の公共図書館は、1990年代以降、利用者が館内で長時間滞在できることを前提にした空間づくりが行われてきた。現在では、国際的な流れを受け、利用者同士の交流のための空間やメイカースペースといった、従来には見られなかった機能を担う空間も見られるようになってきている。また現在新設される図書館のうち複合館は8割を占め、複合館は日本の公共図書館に固有の特徴ともいえる。このように、現代の日本の公共図書館は海外の流れを受けながらも独自の変化を辿ってきたが、その空間的特徴は明らかになっていない。現代日本の公共図書館の空間的特徴の解明は、これからの公共図書館空間の基盤を提供する。

本研究の目的は、単館と複合館の視点から、現代の公共図書館の空間的特徴を明らかにすることである。研究方法は公共図書館の空間に関する主要な文献の精読と平面図分析である。主要な文献の精読では、図書館の建築および空間に関する文献146件の記述から、図書館の空間を構成する室・スペース（構成要素）の種類とその機能、図書館空間に関連した感性的な要素を抽出した。抽出した構成要素・機能の種類は平面図分析での空間の分類に、感性的な要素は平面図分析の結果の解釈に用いた。平面図分析では、2010年以降に設置された特徴的な単館2館、複合館4館の合計6館に対し、機能ごとの面積比の算出、空間配置の分析を行った。複合館はさらに図書館と他施設の分離の可否から2種類に分け、図書館部を分離できるものは図書館部のみを分析対象とした。複合館4館のうち、分離可能であった複合館は2館、分離不可能であった複合館は2館であった。

平面図分析の結果から、従来から重視されていた資料やその提供に関する空間は、現在においても図書館の中心的機能を担っていることがわかった。さらに、学習や集会のための空間といった、資料を伴わない空間が中心的な機能の一つに移行しつつあることが示された。また空間配置の分析から、利用者のための空間を中心とした空間構成や、静かな空間とにぎやかな空間が分離される傾向にあることが明らかになった。

単館・複合館を比較すると、単館は複合館に比べ、資料とその提供のための空間を重視した空間構成であることが示された。これらの空間が面積の多くを占め、空間配置においても図書館の中心的な機能として設置されていた。複合館は複合している他施設の影響を受けながら空間を構成しており、機能ごとの面積比の分析から親子のための空間への注力がみられた。

このように、単館と複合館では、その空間構成に明確な違いがみられた。図書館の新設にあたっては、設置目的に応じてどちらの形態が適しているかを踏まえ計画することが求められる。

(指導教員 小泉 公乃)